

イヒョン 著
下橋美和 訳

▶あの夏のソウル

3・15刊 四六判312頁 本体2200円
影書房

少年少女は戦時下で 何を守ろうとしたか

この夏、大人にも子どもにも手にとって欲しい一冊

東間小織



戦争勃発直後の苛酷な状況下で生きる少年少女を描いた『あの夏のソウル』(二〇一三年韓国・チャンピ社刊)が、下橋美和氏の翻訳により出版された。明日は今日よりも素晴らしいと信じるイヒョンは『ジャーチャー麵がのびちやうよー』(第十三回チャンピ「すぐれたことの本」原稿公募大賞受賞)、『ロボットの星』(第二回昌原児童文学賞受賞)等、良質の童話と児童文学を多数発表してきた一九七〇年釜山生まれの女性作家だ。戦争を体験していない世代でありながら、卓越した想像力と表現力を駆使し、戦争の真っ只中を生きる子どもたちが葛藤し苦悩しながら、

自らの意志を貫こうとする姿を本書で見事に描いた。青少年向け文学として出版された本書は、人名表記の工夫や細やかな解説が含まれるなど、外国文学の翻訳書の中でも比較的読みやすい作品である。十七歳の少年黄殷国(オウイン)は、朝鮮半島の南北を分ける軍事境界線が位置する三八度線付近の江原道鉄原郡で、かつて「親日悪徳地主」の一族と後ろ指をさされていた。一九四五年日本統治から解放後、鉄原からソウルへ父が日本の判事だったことも問題にならない南の地で、変わらず富と権力を維持していた。しかし一九五〇年六月、朝鮮戦争勃発後事態は一転した。一家は北の侵攻から逃れ、殷国の母と妹は釜山に避難し、父は行方不明となった。ソウルに一人残された殷国は、眠ることも食べぬこともままならない日々を過ごす。同世代の友人たちは、共産主義の世の中に希望を抱く者と、共産主義を毛嫌いする者がいて、イデオロギー対立から起こったある事件がきっかけとなり、友情に深い亀裂が入る。それでも殷国は「立場はちがって、心はひとつだった。性格はちがって、友情だけはひとつだった」(p.10)と信じ続けたが、その後徐々に降りかかる出来事により、自分がこれまで知っていた世の中が変わってしまったことを悟る。

もう一人の主人公は、家族と引き離された十四歳の少女高鳳児だ。父親は鳳児が生まれる前に独立運動で命を落とし、生き残った母親は西大門刑務所に収監される。刑務所で生まれた鳳児は祖母に預けられ、貧しい中で命をつなぎ成長し、解放後に一度釈放された母の元でわずか一年足らずの子どものしい日々を過ごす。その後再び刑務所に収監された鳳児の母は、後に共産主義を批判する転向書を書き、釈放されるが、結局刑務所で患った病が原因で世界してしまふ。平壤の名門校の生徒だった鳳児は、自分の母が祖国に背いた「愛節者」だと校内に知れ渡ると、周囲の視線に耐え難い苦痛を感じて学院を退学する。唯一自分を助けてくれると信じた「祖国」への貢献を望み、かつて世話になった人物を頼り、母の魂が眠るソウルへ行くことを決めた鳳児は、意志を貫き同徳女子中学校に編入する。新たな居場所を見つけて意気揚々とするが、その後徐々に明らかになる「祖国」の表情と母の転向の真実に、鳳児の心は揺れ動く。絶望の中で、彼女が心の奥で母の愛を強く求め続け、ただひたすらにやすらぎを求める描写に胸が締め付けられる。

父との確執に葛藤し、友との絆が戦争によって次々と引き裂かれる中、運命の荒波に飲み込まれぬよう逆らいつける主人公殷国が、終盤自らの進むべき道を見出す過程の状況と心理描写が素晴らしい。どのイデオロギーが悪かという追及がされない中、少年少女が戦時下で何を守ろうとし、何を求めようとしたかが丁寧に描かれている点が、戦後生まれの作家ならではの斬新さだろう。

この世界のどこに生まれようと、無条件で守られるべき存在の子と私たち。「あの夏のソウル」には、救いのない時代の中であっても、信念と夢を抱き全力で生き抜こうと闘う子どもたちがいる。二度と子どもたちをこんな目に遭わせてはならないという切実な作家の祈りがある。作家が鉄原郡の朝鮮労働党舎跡を見学したのをきっかけに構想が始まった『1945、鉄原』の続編にあたる本書だが、先に『あの夏のソウル』を読み、さかのぼる形で殷国の叔父である黄基秀が生きた『1945、鉄原』に手を伸ばしてみるのもいいだろう。この夏、大人にも子どもにも手にとって欲しい一冊だ。

(会社員・映像翻訳)